

インタビュー：木村靖二氏に訊く

クリオ： 木村先生は、以前から折に触れて日本人は伝記研究が苦手だとおっしゃっていますし、最近『史学雑誌』誌上に発表されたコラムの中でも「歴史家の歴史」を記録し検証することの重要性を強調していらっしゃいます。すぐれた伝記とは単に一個人の生涯の記録に留まらず、彼の生きていた時代と社会そのものを浮かび上げさせ、映し出すものだと思います。『クリオ』でのインタビューとしては、以前(1990年)先生の東大赴任直後に当時助手だった橋場さんが行われたものがありますので、今回は「人間」木村靖二ではなく、「歴史家」木村靖二の側面の方に焦点を当て、先生の体験をお話しいただくことによって戦後日本と大学をめぐる環境、あるいは歴史学の全体像とまでは行かないまでも一定の線を結ぶことができればと思っています。

ラインハルト・コゼレックは「歴史を歴史たらしめるものは史料だけではなく、テオリ―＝理論が必要であり、その上で客観性と党派性がかみ合う事が必要だ」と述べていますが、今日は客観的でありつつ、先生の *Parteilichkeit* を旗幟鮮明にさせていただけるようなお話を期待しております。

先生は1970年に茨城大学に就職されて以来、多岐多彩にご活躍を続けていらっしゃいますが、その領域は大別3つに区分できると思います。ひとつは言うまでもなくドイツ近現代史研究者としての研究の分野です。もうひとつは大学教育としての教育者の側面、ここには大学の運営や、最近何かと話題になることの多い大学改革という問題も含まれるかと思えます。そして最後に、対象を大学生だけに限定しない広い意味での歴史教育や出版活動、この3つが挙げられると思われまふ。これらの中でも研究がまず先にあつて、教育、出版は時期的にもあとになってから次第に比重が大きくなっていった分野だと思います。したがってまずは研究のことについておうかがいし、次に教育や出版のことについてお話しいただこうと思ひます。

Section 1 研究について

生い立ちから研究者を目指すまで

クリオ： 先生のご家庭は海に縁の深い家系で、函館、伊豆、ご自身今も藤沢の海縁にお住まいであつたと聞いておりますが、その海育ちの先生が、大陸の強国ではあつても決して海軍国ではなかつた近現代ドイツを研究の対象として選ばれたのは、どのような理由があつてのことでしょうか。

木村： そうですね。別にドイツでなければだめだ、というわけではなかつたんです。ドイツに対する関心ではなくて、むしろ「ナチズム」とか「ファシズム」といった現象への興味が最初にあつて、それでだんだん絞つていくとドイツになるということで、イタリアにも関心はあつたんです。ほとんどものになりませんでしたけども駒場の時にはずいぶんいろいろ語学をとつて、イタリア語も本郷にきてやりましたね。当時、1950年代とか60年代にはファシズムが『思想』とかいろんな雑誌でも特集されていたし、あの頃は五月祭の時などに、『13 階段への道』とか『夜と霧』などナチス関係のドキュメンタリー・フィルムを上映していました。あるいは渋谷の映画館なんかでも時々やっていましたね。その種のドキュメンタリー映画はずいぶん見ました。勿論もともとファシズムに関心が非常にあつたから見たのであつて、映画を見てドイツ史研究を始めたわけではないのですが(笑)。

あと小学校の時は小樽にいましたが、たまたま同級生に小林多喜二の甥がいて『蟹工船』なんか早いうちに読みましたね。今から考えるとずいぶんませたと思うんで

すけど、だいたい僕は小林多喜二のものは小学校の5年と6年でほとんど読んでいます。というのは当時のクラス担任の先生が、たぶん日教組のかなり戦闘的なメンバーだったと思うんだけど、「社会科クラブ」なんてのを指導している。そこで猪野謙二の『国民の文学史』を読ませるわけです。別にそれによって教えられたというわけではないのですが、日本の封建的なあり方や前近代的な差別への批判的な気持ちが強められたのはたしかですね。ファシズムとか軍国主義でそのころ何を考えていたのかは怪しいものですが、日本の現状がそうしたものに近いという感覚はかなり強烈にありましたから。そういうものとは断固戦わなければならないと信じていました(笑)。こういうことを言うと教師による洗脳だと受け取る人がいますが、教師の中にはかなり右翼的な考えの人もいましたから、もともと僕自身の中に小さな時から貧富の差とか、身分差別などにはかなり疑問を持っていたということが大きかったと思います。いずれにしても、こうした経験から読書の幅が広がったことは今でも感謝しています。

クリオ： 先生が大学に入学された1960年は日米安保調印の年であり、「総労働対総資本」の三井三池争議があり、さらに所得倍増計画が発表されるという激動の年です。先生が学生生活を送られた当時、日本の歴史学会は時代区分論やロストウの近代化論といった学問上の論争があり、さらには明治百年祭批判、教科書裁判などの政治的テーマをめぐって、これまた熱く煮えたぎっておりました。先生が研究を志された背景には、こうした時代的な影響があったのでしょうか。

木村： まあ、どの程度状況をきちんととらえていたかどうかは、今から考えるとおぼつかないんですけど、日本の現状に対して批判的だったということはあると思います。そしてそういうものを通じて、マルクス主義を軸とする左のイデオロギーに惹かれていったとも言えますね。

クリオ： ですが以前のお話では、先生はすぐに現代史研究に飛び込まれたわけではなく、その前に多少は迂回路がありまして、古代史を一時志されたとか。先程もイタリア史への関心に言及されましたけど。

木村： 歴史、それも西洋史を勉強しようということは、早くから決めていました。文学部にいくのですから、ふつうの就職は頭になかったですね。研究者が高校の教師といった選択しか当時はありませんでしたから。最初古代史を志望したのは、研究条件が整っていてやりやすそうだったということと、現代史はまだ分野として確立していないという事情が影響していました。例えば日本史では明治以降の歴史はやれないらしいなどとささやかれていましたし、歴史学の対象はある程度、時間的距離が必要だともよく言われていました。それからあまり大きな声ではいえませんが、なにがしか「古代のロマン」的なものへの憧れがあったことも否定できませんね。線文字Bの解読の話など大いに胸を躍らせた記憶があります。

クリオ： 現代史という分野は、当時はまだアカデミズムの中で市民権を得ておらず「糊と鉄の」と揶揄されることもあったようですが、ようやくマイクロフィルムの輸入により一次史料へのアクセスが可能になってきた時期でした。そうした黎明期の、いわば最先端の分野に敢えて挑戦された経緯をお聞かせください。

木村： マイクロフィルム史料のなかでもっとも重要であったのは、当時助手であった西川(正雄)さんがいろいろと苦勞されて蒐集された東ドイツの文書館の史料です。もちろんアメリカからのものもありましたけど。東ドイツの史料というのは、当時東ドイツとの国交が回復していないもので、非常に複雑な手続きを経て——今から考えると笑いの話のようだけど当時はだいぶ真剣でね——表にでちゃ困るようなやり方で手に入れたんです。いろんな仲介者を通して、しかも外貨は使えませんが、アメリカ所蔵の史料のコピーと交換するかたちで手に入れたようです。ドイツ現代史はそれを使えば日本でも世界と全く同じ水準でできるわけですから、どうしても使ってみたくてという

気持ちにはありました。ただ僕は卒論では使っていません。

クリオ： つぎに当時の歴史学界は研究会という組織が現在よりずっと生産的に機能していたのではないかという印象があります。1964年、現代史研究会の会報に木村先生と伊東(孝之)先生の史学会報告への批判が掲載されており、これがおそらく先生が最初に発表された文章だと思いますが、いくら規模が小さい研究会報とはいえ一学部生の学会批判が活字(ガリ版ですが)になるというのは現在では考えられません。

木村： まあ当時の現代史研はこちんまりしていてね、大学院生が中心で、助手の方もいましたけどおたがいの関係が非常に近いんですね。また現状の批判ということでは、基本的には共通の意識を持っているわけですから。また研究会が大事だったのは、研究上の情報量が圧倒的に少なく、そこでいろんな知識を手に入れなくてはいけない、という理由があったんです。本を買うのだって大変で、なんといっても当時は1ドル360円ですから。したがっていろいろな分野の情報を手に入れるだけではなく、もちろんこちらも新しく読んだものは伝えるわけです。

そういう意味で研究会は情報を全体で共有するというのが第一で、思想性がどうのこうのというんじゃないんですね。必要に迫られてやっていたわけです。当時のロシア史研究会とかもそうでしたね。私もロシア史研にはずいぶん聞きに行きましたよ。菊地昌典さんの大問題になった本の合評会で、われわれも固唾をのんで聞いていて、今でもよく覚えています。当時、研究会はそんなにたくさんはなくて、例会がきちんと機能していたのはロシア史研と現代史研くらいですが、それでもずいぶんと機会をみて他の研究会に行きましたね。

現代史研と村瀬興雄先生

クリオ： そのようなリベラルで「思想性の薄い」現代史研のパトロンを務めていらっしやったのが村瀬興雄先生でした。実は私が高校時代に初めて読み、ドイツ史への興味をかき立てられた研究書は村瀬先生の『ドイツ現代史』で、その後ご本人にお目にかかった時は大変感激しました。しかし直接お話をうかがう機会がほとんどないまま先生は2000年にお亡くなりになり、木村先生が追悼文を寄せられています。これは胸を打つ名文だと思います。そこで村瀬先生との思い出を少しお聞かせください。

木村： 村瀬先生は先生の方からこちらに近づいてくださるところがありました。東大の先生だってもちろん私は尊敬していますが、やっぱり「先生」で、膝をつき合わせて話し合うという、そういう方々では全くありませんでした。そこにいくと村瀬先生は、いろんな意味で相談しやすいというか、お話ししやすい方で、今、村瀬先生を省みて、自分の教師としての至らなさをつくづく感じます。ああいう先生は当時貴重でしたね。先生というのは自分の説をわれわれに示してくれるタイプと、話を聞いてくれるタイプがありましたけど、村瀬先生は完全に話を聞いてくださって励ましてくださるというタイプでした。

それであの会がだいぶもった、ということは確かですね。その他にも歳は10くらい離れているんですけど、西川さんとか、お亡くなりになった富永(幸生)さんとか、あるいは鹿毛達雄さんとか、当時「三人組」とか「四人組」とかよばれた人たちがいました。あるいは今はもうほとんど離れていますけど、ラテンアメリカやっている加茂雄三さんとか、ベトナム史の木村(哲三郎)さんとか、フランス史の山極(潔)さんや喜安(朗)さんもいたし、当時の現代史研はドイツ史だけに限らず、いろんな人たちがいて、本当に勉強会という雰囲気でも耳学問には絶好の場所でしたね。

ハルガルテン・ショック

クリオ： 1965年11月、ハルガルテンが来日します。海外から大物の研究者が来日し、討論することは今日ではさほど珍しいことではありませんが、このハルガルテン来日はその

皮切りであり、当時の期待感や興奮は並々ならなかったものであることが当時の文献から読みとれます。先生はすでに卒業論文の頃からドイツ革命に焦点をあてていらっしゃる、最近まで一貫して関心をお持ちですが、そのような研究テーマに選択にこの「ハルガルテン・ショック」というものは、どのような影響を与えたのでしょうか。また先生が好んで言及される研究者にカール・シュミット、K. D. ブラッハー、そしてこのハルガルテンがいますが、この3人にはいずれも「独裁」に関する大部の研究があるという共通点があります。「独裁論」、そしてその民主主義との関係、これこそが先生の関心の基軸にあるのではないかと思うのですが。

木村： そうですね、最初に言ってしまうとカール・シュミットは書物から学んだ人で、発想とか分析のやり方に関してははずいぶんと影響を受けていると思います。丸山（真男）さんが受けているから、丸山さん経由で学んだという面もあるんですけどね。一方、ハルガルテン先生に関しては、説とか考え方で影響を受けたという記憶はほとんどないんです。むしろ影響を受けたのは、徹底して史料でもの言う、という歴史学の方法についてです。当時日本の歴史学者とハルガルテンさんとが議論するものすごくすれ違うんです。つまりこちらが資本主義のあり方とかなんとか言うと、向こうは「じゃあ、どこに史料があるのか、具体的なものは何か？」と問い詰めるわけです。こちらはそう具体的なものでなくても「全体の流れ」ですよ、とか「総資本」といった概念で、なんとか分かった気になってしまうんですね。だから、資本主義がファシズム政権に関係している、なんて言うと、「どこの会社が金を出しているのか？」とかすぐそういう話になる。確かに史料の根拠がまったくないまま「資本の委任を受けた政権」とか「ファシズム政権」といった言い方がはたして可能なかどうかという疑問はありましたが、とにかくあの事実の突きようはただごとではなくて、一月ほどゼミをやってたんだけど、ものすごく閉口しました。とにもかくにも「そういう観念的な話ではなくて、事実はどこにあるか、あなたの言っている根拠はどこにあるか？」ですから（笑）。一番のショックはそこですね。如何にこちらが概念操作みたいなものだけで歴史学をやっているか、という点を鋭く突かれたわけです。

クリオ： そういうショックがその後の現代史研で活かされていったと。

木村： そうです、それは大きいですね。とにかく、向こうの人と議論をしようと思ったら事実というか史料を持ってこないとおよそ話にならないということですね。

クリオ： 現代史研の他にも先生は、コミンテルン研究会や社会運動史研究会といった研究会を足がかりにその後活動されます。当時の研究会は若手が鍛えられ、あるいは相互に交流を図る自由なフォーラムでありました。この人脈から生まれたお付き合いもその後いろいろなところで生かされていったと思います。しかし研究会は同時にそれ自体制度化し、アカデミズムの道具になる危険を秘めていたものであったとも言えます。その危惧は当時からあったようで、現代史研究会では1967年に「現代史研究者の課題について」という増刊号がでまして、そこにはこういうことが書いてあります。「思うに10年前まであれば研究会はそれだけで意味があった。現代の時点ではむしろ現代史研究者こそ、その研究の意義を自ら問わなければならないのではないだろうか。（ファシズム）や（ロシア革命）といったテーマはその研究の意義について疑う者がいないだけに、研究者が自明の後ろに寝てしまう危険に晒されている。意義のあるテーマである、ということに安心して実際には訓誥学に等しい仕事しかしていない、という状況が生まれてはいないだろうか（後略）」。このような両刃の剣ともいえる「研究会」というソシアビリテについて、どのようにお考えですか。

木村： これはたぶん西川さんの文章だと思います。確かにこの頃から現代史研が偉くなってきたんで、それに対する自己批判なんですね。つまり、私が参加した時なんかまず『現代史研究』を売るとか、そういうのを書くとか、いわば手弁当でみんなやっていたわけなんだけれども、ところがある日、気が付くと現代史研がそれなりの影響力を持つ

というかな、ロシア史研は昔から立派なものでしたが、そういうのに近づいてきたんです。ちょっとした研究会のはずなのに、権威付けというのかな、実際の話として構成メンバーが偉くなってきた。昔はせいぜい大学院生だったのが、この頃になると大学にポストを持つような人がいて、自分は若いつもりなんだけども、下から見たらみんな偉くなっちゃってるという状況がありました。

私が加わった『社会運動史』も80年代半ばで解散しました。あれもやっぱりだんだん偉くなってきて雑誌はそれなりに出るし、変に売れるようになってしまって、それでやっぱり危険だと言うんですね。私は特にそうは思わなかったけれど、そういう点について危惧する声がありました。そこが研究会の難しいところだと思います。

クリオ： 社会運動史研究会は「元東大西洋史の仲良しグループ」と呼ばれたというメンバーでして、喜安朗先生、北原敦先生、福井憲彦先生、近藤和彦先生、石井規衛先生などそうそうたる顔ぶれです。これは1985年に活動を停止しているようですが、その研究会の顔ぶれから察するに若手の既存の歴史学への対抗活動を、あるいは68年以降に登場するべきあらたな方向性をなんとか模索したいという考えがあつて、目指されていたのでしょうか。

木村： うーん、非常に簡単に言うと東大全共闘系の西洋史学の人たちにとって、対抗すべき「既成史学」というのが二つあったんです。ひとつは官学的なもの、それからもうひとつはいわゆる「代々木」（日本共産党の別称）のそれです。そこでそれらじゃないもの、大げさにいえば「第三の道」を目指そうという機運はありました。おそらく、こうした意識は68～70年の時にはすでに芽生えていたと思います。

ところが私は大学闘争の時にはドイツにいましたから、実はあまり語る資格がない（笑）。この研究会にもいわば後から入ったわけですし、最初3、4年は居心地が悪いというか、ちょっと困ったようなこともありましたね。つまり、すでに多くの人たちは闘争で共通体験があるわけで、その間に入れてもらうといった雰囲気でした。

留学と68年革命

クリオ： さて、先生は1968年3月、修士課程をおえられるとすぐに西洋史の助手に任命され、またその年のうちにミュンヘンにご留学という慌ただしいことになりますが、当時日本ではすでに学生紛争が始まっていました。前年の10月には羽田事件、その年の1月には医学部のスト突入をもって紛争は直接東大にも飛び火します。現代史研ではこれに対して「ベトナム問題に関するアピール」が発せられ、賛同会員リストには先生のお名前も見えます。また歴研の報告に松尾章一、伊集院立の両先生と並んで木村先生が行われたものがありますが「近衛新体制期の教育政策」というもので、先生のお仕事の中で日本現代史のテーマを正面から扱ったおそらく唯一のものではないでしょうか。タイトルを見た時は同姓同名の人違いでないかと思いました（笑）。しかも内容は大変に熱のこもったもので、イデオロギー色の濃いものになっています。その点からも、その後の先生の歩まれた路線とは一線を画したものになっていると思うのですが、こうした姿勢は当時当たり前のものだったのでしょうか、それとも先生はやはり突出した存在だったのですか。

木村： いや、これはある種のオーソドックスです。「代々木」というのは当時のオーソドックスですから。大学院に入ってすぐかな、歴研の現代史部会の編集委員やってくれと言われたんですが、私はちょっと乗り気しなかったんですね。確か和田（春樹）さんと北原さんが説得にやってきましたが「う～ん」とか言って（笑）。東大の西洋史では歴研関係者が少なく、珍しかったんですね。それで最初はちょっと、入ってみるとやはり相当な違和感がありました。つまりイデオロギー的なものが強いんですね。誰だったか日本古代史のある方が大会のための予備報告をしたら、思想性がないと批判され、編集委員の中である方向に導くような発言があるんです。私はへえーと呆れ

ていましたね。そこでこの報告の話に戻ると、これは松尾さん誘われて歴研の編集委員の担当としてやったわけですが、それでもだいぶ史料は読みましたよ。

クリオ： そしてこの直後に先生は日本を後にされます。

木村： 前年に DAAD（ドイツ学術交流会）の奨学生に受かっていましたからね。先程修士課程をおえてからすぐ留学したと言いましたが、実際は博士課程にも 1 年在籍していたので博士課程中退になります。留学が決まっていた時の 68 年 4 月から西洋史研究室の助手になりました。実は 2 月頃でしたか、林（健太郎）先生に助手になりなさいと言われたのですが、いったんお断りしたんです。でもここが林先生の偉いところで、一応半年務めると休職費が出るんですね。で、休職費は足りない奨学金の補いになさいと言うわけです。今から思うと大変ありがたいご配慮で、ああそんなものかなとありがたく頂戴しましたけど。しかし出発前には文学部は共関係の学生によって全部閉鎖されていましたね。

クリオ： このように動乱の東大をあとにヨーロッパに向かわれたわけですが、彼の地でも社会は激変しておりました。パリの「5 月革命」に続いて、先生の到着とおそらく前後してワルシャワ条約機構軍のチェコ侵攻が始まりますし、翌 69 年には西ドイツ全土に非常事態が宣言されます。とにかく大変な状況であったと思われるのですが、このあたりのお話はこれまであまり先生からうかがったことがありません。ミュンヘンではさほどの騒動は起こらなかったという風に言われていますが、先生が体験された範囲では「68 年」はどのようなものでありましたか？

木村： 確かに激動なんですけど、実際にはロシア革命の時だってオペラを見てる人がいたみたいだね、普通に生活を送っているとたいしたことはないわけです。ただ、ちょうど語学の研修に行っている時にチェコの事件が起って、一緒にいた日本人が車を持っていてね、そんなに遠くないので、チェコの国境まで見に行ったことはあります。でもそれよりも一番驚いたのは、語学のクラスの同級生にチェコの技師がいて「私はただちに亡命します」と言って、妻と一緒に亡命しちゃったことです。日本人だったら国籍がどうだとか悩むんだけど、彼らは悩まないんですね。もう家族がいるからいい、と。これにはほんとに驚きました。「国に帰らないのですか？」とか「誰かご親族は？」なんてのは全く日本的発想でして、まあ、あの人はずっと変わっていたからかもしれないけど（笑）。

でも、そこから国や国籍、あるいは国民国家とかいう問題にとりわけ強い関心を持つようになったのは確かです。人があんなに簡単に国を捨てて他の国に移れるというのが、非常にショックでしたからね。

クリオ： 向こうに比べれば、ミュンヘンではまだましだったということですか。

木村： 試しにデモ隊にも入ってみましたけど、その前に発砲事件があって学生が傷ついたということで、警察が恐縮しちゃってるものですから、徹底して守られているデモなんです。電車なんか全部止めて、車も迂回させちゃうんです。で、デモがしつこくと通り過ぎて、前と後ろに遠くパトカーがいて、さらにデモの先頭には私服の警察官が学生と同じような服を着て、次は右に曲がりますなんて誘導してくれる（笑）。おまけと一緒にシュプレヒコール——当時、文部大臣打倒とかいう話だったので「Nieder mit なんとか」っていうもの——を叫んでくれるんですよ（笑）。そうやって、おそろおそろ引き連れていくわけだね。すごく保護されているデモだなという印象を持つと同時に、エリートとしての学生というのを初めて認識しました。学生は本当にエリートでしたね。

確かに、日本でも大学生はエリートだったし、東大ということであればなおさらだったはずですが、日本の場合には大学間の序列が想定されていて、その中の位置づけが重視されていたように思います。ドイツは全体として身分としての学生が尊重されているとそのとき感じました。もっとも 70 年代にはドイツも大学新設ブームで、大

学生の数も増大して、こうしたことは過去のことになりましたが。

クリオ： そうしたところは「エリートの反乱」と言われた東大紛争や、その後の事情とも通じるところがあるように思います。しかし日本の学生紛争についてはそれに関わった世代の「総括の欠如」や、結果的に集団心性が形成できなかったことなど否定的な意見がより若い世代から提示されています。確かに直接運動に参加した人たちにとっては語りにくいものがあると思うのですが、先生は比較的外部からご覧になっていたわけです。そうしたご自分の体験から、自分は「68年世代」(Achtundsechziger)である、というようにお考えですか。それとも自分のアイデンティティはそれ以外の体験に根ざすものの方が大きいとお考えでしょうか。

木村： 今言ったような事情で僕は日本にいなかったから、さすがにアイデンティティとは言いにくいんですが、非常に影響は受けていますよ。総括しなかったとおっしゃるけど、社会運動史が総括のひとつのあり方ですからね。僕はその限りでは、彼らはそれなりにやってきたと思っていますが。

クリオ： その影響というのは、社会民衆運動と保守エリートという研究の二軸線というものでしょうか。

木村： そうです。もともと権力というか体制というか、その実体や構造を一方では権力の担い手である保守派の側、つまり上からと、下からの労働運動や社会主義運動の両方から考えようということでしたが、その際下からの動きはドイツというならばドイツ共産党に焦点を当てていました。ドイツ留学中も共産党関係の史料はそれなりに見ましたし、帰国後『史学雑誌』に共産党研究の動向を書いたのはその産物です。しかし、社会運動研究会では関西の人や駒場の国際関係論の人も多くいて、いろんな考え方や違う分野から刺激を受け、党派でない民衆運動や社会運動への関心が移っていったわけです。

クリオ： さて 1970 年の帰国後、先生は茨城大学の専任講師を振り出しにいよいよ日本歴史学の第一線に立つことになります。75年には立教大学に移られました。しかしこのごろから日本の歴史学界は大きな動揺と再編の時期に入ったようです。この頃歴研は 71 年大会「安保体制の新段階と我々の歴史学」と題した議論を行っていますが、その背景には「68年革命」の失敗、高度成長期を経て日本が生活大国化したこと、伝統的戦後史学の政治史偏重への批判などがあったと思います。先生の感じられた当時の空気は、どのようなものだったのですか。

木村： やっぱり、経済成長には驚きましたね。それまでの古典的な「貧困」がみるみるうちに消えうせていくといえますか、社会が急速に変わっていききましたから。それと同時に、だんだん戦後歴史学が惰性に流れていったという印象がありました。だから、みんなおかしいと思っているのだけでも、結局変わるものがないんですね。それであの時に感じたのは、変わるものがない時には、古いものがずっと——みんな困ったことだと言いつつも——続いていくんだということです。70年というのは、社会運動史に一番力が入った時代であったはずなんですけど・・・。

80年代の危機と社会史の登場

クリオ： やはりすぐに「新しい歴史学」というものが始まったわけではなく、古いものとの葛藤は 70 年代を通して続いていたのですね。そうした閉塞感・焦燥感にとらわれたところに、いわば「必死の代案」として社会史が登場してくるのだと思います。『思想』誌上で初めて社会史が特集として取り上げられたのが 1979 年の 9 月で、また歴研も 83 年、創立 50 周年を記念して「いま問われていること、問いかけること」と題して現代の歴史学を扱い、84 年にも「今日の日本と歴史学」「社会史と民衆史」などの特集が組まれています。

こうした動きの中で、先生のお仕事もそれまでとは一線を画すような、いわば構造

的な要素を前面に押し出した議論が見られるようになります。その嚆矢となったのが1977年の「(政治)の解放」です。これはかつて石井規衛先生が当時非常に感銘を受けたと激賞されていた論攷ですが、このような先生の「転回」にはどのようなお考えがあったのでしょうか。

木村： 自分自身としてはあまり転回だとは思っていないんですが。まあ石井氏はこういう議論が好きだから(笑)。とにかく狭い制度史的な分析をやっちゃしょうがないわけでして、政治史というものをどう新しく取組むか、あるいはその構造は如何なるものか、という問題意識はありました。DNVP(ドイツ国家国民党)の研究にドイツに行ったものの、結局これまでの政治史の枠でやってもどうにもならないという危機感は自分でも感じていました。ただ他方で、政治史はだめだから退却するというのではなくて、私はどうしても国家というものに強い関心がありましたので、なんとか政治社会史とかそういう方向に行けないか、というのは70年代に考えたことですね。

クリオ： この社会史の新潮流は「アナール」に代表されるように、むしろフランス史やイギリス史そして中近世史を中心としたもので、近現代史はちょっと遠いのではないか、という話が当時の『社会運動史』でされていました。とはいえ、ドイツは蚊帳の外にいたのかというと、フィッシャー論争、ヴェーラーらビーレフェルト派をめぐる西ドイツ社会史論争、さらに英独の歴史家を巻き込んだ「特有の道」論争など、70年代から80年代にかけてドイツの歴史学もまたむしろ目まぐるしい動きを見せています。こうしたドイツの歴史家たちの動向を日本は積極的に受容していきまして、ヴェーラー、コッカ、W. モムゼン、ヴィンクラーなどはすべて70年代に来日しておりますし、非常に関心が大きかったと思います。こうした状況において、現代史研究者の間に何かしら共通の戦略のようなものがあったのでしょうか。

木村： ヴェーラーの登場についてはかなりはっきりと覚えています。僕は68年に大野英二先生とミュンヘンで一緒して色々お話をうかがったのですが、ちょうどその時にヴェーラーの『ビスマルクと帝国主義』が出版されました。僕はあわてて読んでヴェーラーを知っていたわけですが、大野先生は非常にうれしそうに「これは講座派だ、講座派の考えに非常に近い」とおっしゃっていました。つまり日本では新しい刺激を受けるんじゃなくて、むしろそれまでの日本の枠組みに近づいてきたという感覚で読むんですね。社会史や社会構造史などは、日本のドイツ史を変えるというんじゃなくて、むしろ日本の講座派の正しさを確認するというか、やってきたことの正当性を保障するという視点で受け取った人が多かったんじゃないでしょうか。だからずいぶん翻訳がでているわりには、日本の中では「議論」にはならなかったですね。

クリオ： 輸入というか。

木村： そう、輸入というか近づいてきて、親近感を持つという・・・相当以前にある本の書評に書いたと思うんだけど、僕は、こうした受取め方はあまりよくなかったと思うんですね。つまり、日本がヴェーラーとかフィッシャーとか、それはそれで大事なんだけども、その派だけを重視してしまって、他のドイツ歴史学の研究成果はみんな保守派の産物になっちゃうんだよね。ニッパダイなんか、ご本人は社会民主党だけれども、何となく右とか保守派という発想でとられてしまって、彼の批判はきちんと読まれなかった。

クリオ： ドイツの研究の摂取においても、また日本の過去の歴史学に対してもゆがみがあって・・・。

木村： 要するに日本の投影になっちゃってるということだ。

クリオ： 日本の学界におけるこうした社会史への傾斜は、80年代後半にはいると全般的なものになります。一次史料にあたって詳細な分析を行うマニエールが定着した一方で、職人技をよしとして、例えば現代政治にたいして積極的に提言していくような雰囲気は失われたようです。その結果かどうかはわかりませんが専門領域の果てしない細分化、

蛸壺化の弊害が指摘されるようになりました。

この点に関して先生は以前、自分を客体化できる視点をもっていれば大丈夫、蛸壺は回避できる、ということをおっしゃっていましたが、不幸にして問題は個人の態度という次元のものではなく、むしろ日本における歴史研究に内在的にかつ構造的な要素があるような気がします。どうして社会史の隆盛とともに、「全体を見る眼」が失われてしまったのでしょうか。

木村： やはりひとつは、グランド・セオリーに対する嫌悪感というか反感ですね。僕はそこがよく分からなくて、グランド・セオリーというのは必要だと思ってるんですけども、それが例えば「マルクス主義」というとすぐ党派性だとかソ連だとかに結びつけられてしまう。でも啓蒙主義以来のヨーロッパの近代思想というのを考える時、はたしてマルクス主義や社会主義思想を抜いて考えられるのかどうか。それを例えばどこかの政党とくっついているとか、政党が解釈権を持っているマルクス主義——向こうでいう「パルタイマルクスismus」——がよくないとか言うのだけでも、それをあまり嫌悪するあまり、パルタイでないマルクス主義も一緒に流してしまう。賛成とか反対とかを問わず、全部イデオロギッシュな反応になっているんです。僕はそれはよくないと思いますね。ホブズボームの著書も、向こうの書評はマルクス主義者だけではない本であるとか堂々と書いているくらいなんですけど、ああいう本がどうして日本ででてこないのかというと、あれはグランド・セオリーがないとできないからなんです。つまりグランド・セオリーというのは一種の羅針盤みたいなもので、自分の研究というものが今どこを走っているのかを知らせてくれるものなんです。「地図のない航海」だなんていいですけど、そういう意味でグランド・セオリーはある種の「地図」ですね。というわけで、そもそもグランド・セオリーと実証研究を二項対立というか *entweder oder* にとらえる議論自体が僕には分かりませんね。もちろん悪いグランド・セオリーもありますよ。でもそれを見分ければいいわけでして・・・。

クリオ： 確かにこの時代から、かつてのグランドセオリー＝マルクス主義の文献が読まれることは次第に少なくなりはしましたが、代わってフーコーら構造主義者のとくに権力論やジェンダー研究、新左翼の議論などが次々に登場し、さらにその後はいわゆる「言語論的転回」が大きく歴史学のあり方を変えていくこととなります。しかし先生のご研究は、テーマとしてはドイツ革命、ヴァイマル共和国、ファシズムと基本的に不変のままです。かといって先生がこの新たな思潮に無関心であったどころか、むしろ積極的にご自分の議論に取り入れ、研究を進める支柱として活用されているようにも見受けられます。例えば山本秀行先生との共訳のポイカートの『ある近代の社会史』は90年に出版されています。このような80年代以降の歴史学の転換から先生自身はどのような影響を受けられましたか。

木村： 小さい個別的な研究を除くと、やっぱり面白いのは、今言ったグランド・セオリーではないけれども、近代とは何かとか、国民国家とは何かといった議論を行っているものですね。たとえば、前に話したホブズボーム、あるいはウォーラーsteinなどがそれですし、日本の歴史家では網野（善彦）さんなどのお仕事、それから直接的にはなんと言っても柴田（三千雄）先生の『近代世界と民衆運動』です。それからこれはあまり言ったことがないのだけれども、僕はシーハンとか、ニッパードイ、ヴェーラーなどの概説や通史にずいぶん影響を受けますね。どういう時代の捉え方をしているのかとか、どうしてこういう章構成になっているのかとか、そういう点には非常に関心があります。

クリオ： そのような重要な著作が次々と問われるようになった一方で、歴史学への興味全般に後退しているとも言われるようになったのはこの前後、80年代半ば頃からはなかったのでしょうか。例えば川北稔先生は、これは所詮固定的な一局面の分析しかできない社会史に嵌った結果、歴史学が時代相の変化をとらえることも、そして未来像を

提示することもできなくなったためだ、と批判されております。このような中に、革命 70 周年を期して——また 1968 年から 20 周年でもありました——先生の長年のドイツ革命史研究を総合した『兵士の革命』が出版されたわけですが、この本で目指されたことについてお話しいただけますか。

木村： この本は本来二部作の予定で書いて、後の一部はまだ出ていないわけなんだけれども（笑）。まあ最初の構想は単純だったんです。ドイツ革命をその主要な担い手である「兵士」と「労働者」という二つの社会階層から見てみるとどうなるか、というものでして、ドイツの場合、農民はほとんど出てきませんからね。つまり一種の複合革命論という話だったんです。ただやっていくうちにだんだんと、少し自分の書いたものとしてはやや人間臭くて——まあ皆さんには構造的に見えるかもしれないけれど——ずいぶん人間が出てくる、自分としてはややロマンチックな性向の強い歴史学になっているのかな、という嫌いはあります。確かにそういうところには、ある種の社会史の影響がありますね。ただこの場合の社会史の影響というのは、必ずしもフランスの潮流などからじゃなくて、さっきも言った網野さんのような日本史の人から受けたものの方が強いのですが。

「短い 20 世紀」の終焉

クリオ： さて、1989/90 年の転換と東欧社会主義体制の終焉、さらにドイツ再統一や湾岸戦争と続いた諸事件は、あれよあれよという間に激震となって世界を覆い、その余波を日本も免れることはできませんでした。しかし、これに対する歴史学の反応というのはむしろ受け身的であったように思います。当時は「ミネルバの鼻は夕べにならないと飛ばないのだから、まだ言うべきではない」といった感じでしたが、これが 60 年代か 70 年代の出来事であったら大変なことになっていたのではないのでしょうか。私はちょうどこの頃大学に入ったのですが、西川先生をはじめとする少数の例外を除いて十年一日のような教養課程の講義にすっかり失望したことを覚えています。当時先生は日本ドイツ学会のシンポジウムに精力的に参加されていますし、またある別の講演の中で印象的なことをおっしゃっています。「歴史家の沈黙」というのがそれです。ドイツ統一や EU への統合、また外国人排斥の広がり、こうしたアイデンティティの危機を前にしたドイツの歴史家たちは「歴史家論争」当時とはうってかわって沈黙してしまいました。しかしこれは日本の歴史家においても当てはまると思います。当時の考えをお聞かせください。

木村： まずドイツの沈黙は分かるんです。全く予想もしないことが起きちゃって、つまり西と東で別々にやっていこうと思っていたら、くつついちゃったわけですから。それでみんな言葉を失ってしまった……。むしろ僕は日本の方が問題だったと思うんです。ソ連の社会主義はいろいろあって、もちろんそれに賭けた人もいた。でもある意味ではみんなその脆弱さに薄々気が付いていて、やっぱりそうだったかということで、しーんとなったというか、力がなくなってしまった。あの時、負け惜しみではなくて、こうこうこうだからマルクス主義はまだ大丈夫だとか、マルクス主義の限界はここにあるんだとか、そういうことをちゃんと言ってくれる人がいなかったのが悲劇なんです。ホブズボームはそれを言っていますからね。僕は、なるほどホブズボームというのはただ者ではないと思いましたね。マルクス主義が提起していた問題は 1980 年代でほぼ終わり、あるいは解決済みになっている。何故ならマルクス主義者が言ってきたことは、ほとんど資本主義の方で実現してしまったからだ、ときちんと説明しているわけです。まあ多少は彼の負け惜しみもあるかもしれないけれど。

ところが日本では、戦後歴史学をやってきた人があらかたしーんとしてしまって、なんかこう、時と一緒に過ぎ去っていけといった感じで、結局総括は何も出ていない。あれは驚きですね。だから僕自身、最近ではマルクス主義の意義やグランド・セオリー

の重要性を唱えるようになってきています。もともと僕はへそ曲がりだから、みんなが右を見る時は左を見て、みんなが左を見たら右を見ておけば多少バランスがとれるんじゃないか、なんて思っているからなんだけれども(笑)。

「9月11日」からその後

クリオ： 先生の最近の研究活動は、国民国家をどうとらえるかという問題を中心に据えられています。90年代半ばの国際化やその後のグローバル化の議論が喧しかったころから、先生はそれらとは一線を画し国民国家の抗基性というものを強調されています。その背後には、すでに85年頃からいろいろなところでお書きになり、また発言されているように「近代」をひとつの特徴を持った時代としてとらえ直し、それによって「現代」を批判したい、という意図をお持ちなのだと思います。こうした「木村史学」ともいうべき歴史解釈は2001年のアメリカへのテロをきっかけにした変化によって、今後どのように修正ないし変容を遂げていくもののでしょうか。

木村： 昨年秋のニューヨークの事件には驚きましたよ。それによってこれまでの見方を修正するかと問われれば、今のところそこまでは考えていません。国家間戦争が内戦型に移行して、これまでの戦争観が通用しなくなるということはもうかなり前から指摘されています。冷戦後の唯一の勝利者で現代の最先端アメリカが標的になったということと、手段がこれまでの「作法」の枠を完全に越えたという衝撃、それにテレビでの生中継のすごさもありますが。

国民国家についていえば、以前はとりわけナチス・ドイツを例にその問題点を強調していたわけですが、近年の議論にはやや疑問を感じていて、指摘の通り、むしろその積極性を改めて考えることも必要だということを言うようになりました。国民国家の問題は「近代」一般の問題と言い換えてもいいと思いますが、フランス革命から近代や国民国家が発した最も重要な理由の一つは、人権を広げ、守るという理念とそのための装置であったわけで、それが国民の同質化や排除を強制したからといって、装置そのものを捨てていいのかということです。これもどこかで書いたことですが、近代とか国民国家とかはそのなかに危険な要素、たとえていえばガン因子のように増殖したら社会そのものを破壊しかねないものを内包していると僕は考えています。ここからそうした危険性を持った近代の全面批判にいか、増殖をくい止め、危険を発現させない歯止めを考えているかという違った対応がでてくるわけですが、おわりの通り僕は後者です。次の歯止めを用意しておかないうちに、今の歯止めが欠陥があるからという理由で取り外してしまうと、ダム破壊のように一挙に決壊するか、システムが暴走してしまうというのが、基本的な見方としてあります。昔はそうした激動のなかから何か新しいものが生まれる、なんぞ空恐ろしいことを考えたこともあったのですが。

それで思いだしました。先ほど言い忘れたけれど、1970年代の教訓というか、転換というか、その背景の一つに僕自身の革命観の変化があります。それ以前は一挙的な社会革命を現状打開の方法として漠然と想定していたのですが、中国の文化大革命、カンボジアのクメール・ルージュの革命はその実態を知るにつれ、一挙的社会革命の無謀さを思い知りました。

あと僕は昔から流行るものには半歩下がってついて行く、という癖があるんです。流行っているものは確かに面白いですよ。面白いからみんな注目するわけですよ。ただその面白さに惹かれないでちょっと用心してから行く。つまり、その意味では保守的なんですね。

クリオ： 研究のセクションの最後としてうかがいたいのですが、先生方の世代が最近の大学院生や学生にたいして最も批判されるのが思想性の欠如と言いますか、政治性のなさです。具体的には歴史理論の浅さないし欠如ということがあると思います。最近先生が

お書きになられたとおり、研究史をしっかりやることなく個別実証の海に飛び込み、あえなく溺れる者、あるいは毒にも薬にもならないと見えるものを一大発見のように大騒ぎする者、こうした傾向は確かに存在すると思いますが、それはどうやら個人の「若気の至り」というよりは世代に関わるより長期的でかつ根深いものだと思います。このような歴史学界内部の世代の違いという問題をどうお考えでしょうか。先生の最近のファシズム論への傾斜はこうした若手の態度への先達からの対応というものが含まれているのではないかと思うのですが。

木村： まったくないとは言えないけれど、そう深く考えてもないね（笑）。ひとつはね、それは世代の問題なのか、それとも日本の歴史学界のあり方の問題なのかという疑問があります。それ以前にそもそも日本では歴史学界が成立してないんですね。これは樺山（紘一）氏とよく話すことなんだけど、誰にむかって論文を書いているのかということが自覚されていないわけです。普通の世間人が『史学雑誌』を読みますか？ あれを読むのは専門家であり、論文はまず学界に向かって書くものですよ。そう言うとなら「象牙の塔に籠って狭い」とか決まり文句で批判する人が出てきますが、そもそも「象牙の塔」がないんだからしょうがない。

もちろん西洋史でも学会が成立していないわけです。そこで議論を誰に向かって言っているのかというと、非常に狭い集団、つまり何とか史研究会とかそういう各国史研究がぞろぞろあるでしょ。学会がきちっと成立してなくて、狭い集団だけでやっていてそこで書く。何故研究史を疎かにしてわりあい平気かということ、学会を往き来しないからですよ。学会の成果を踏まえて、それに対して自分はこういうふうに見えるつもりですよ、ということと言わない。研究史をまとめて「したがって今までの研究史は意味がない」といったっていいわけですよ。踏まえるというのは、蹴飛ばしてもいいんだからね。ただし、読んで蹴飛ばさなきゃいけない。結局、何かというと、学界とか、自分がこれから入っていく同業者に対する意識がないんですね。これが一番問題であって、必ずしも世代の問題じゃないと思いますね。古い世代でもそうです。

あるいは西川さんが30年も前から「註をちゃんと付けろ」と言っていますね。あれは研究者の共通の了解事項を大事にしようということなのに、いつのまにかマニュアル化してしまっている。西川さんの話の前提にあるのが何かといたら、それは学界という共通項を大事にして学界をつくっていきましょうということなのに。で、結局研究者同士がバラバラになってしまう。繰り返しになりますけど、日本の大学院生や専門家は学界というのを意識しないというか、あるいは学界というものを積極的に自分が作っていったらいいんだという意識が希薄であって、僕はそれが一番問題だと思うんです。

Section 2 教育について

クリオ： 先生は弱冠27歳で就職されてのち、教壇に上がることで30年になんなんとする経歴をお持ちですが、そのスタイルはかなり特異なものがあるように思います。何よりも、ゼミで発表者の報告が終わるやいなや先生が延々とコメントを入れられて、その快刀乱麻を断つ話術に出席者一同一言もなく息をのみ、また煙に巻かれるというやり方は、私の知るところ日本でもドイツでも、木村先生以外に一人もいらっしやしません。こうした先生の独特のスタイルは、いつ頃から確立されたものなのでしょうか。また、先生の師匠に当たる先生や先輩から、学生への接し方で影響を受けたということはあるのでしょうか。

木村： 僕としては学生諸君に、まずは研究書の読み方とか、註の意味、あるいは書評の探し方などを教えるのが重要だと思っていますから。最近では皆さんもだんだんわかってき

て、目次はしっかりご覧になるし、序文や著者の経歴なども読んでその研究を位置付けるようになりましたけど。でも、もともと課題の本は全員読んでくるというのが前提なわけだね。それが実際には読んできやしないわけだ（笑）。前にやったことがあるんですが、そうすると、あんまり読んでいないのに議論しても、印象批評みたいになって、あんまりいい議論にならないんですね。

私は報告する人の文献は一応読みます。自分にも勉強になりますからね。さらに、この本でこの部分は使えそうだとするところは読書ノートに書き込んでおく。そうすると、みなさんのレジュメとあわせて後で役立ちますよね。そもそも私の場合、大学院のゼミの基本目的はデータベースづくりだと考えています。たくさん本を読むのはそのためで、やっぱり20代はどんどん頭に入りますよ。しかもよく覚えらる。50代になって自分でも経験するんだけど、そろそろあの本は読まなくちゃと思って見てみると、全部線が引いてある（笑）。あわてて読書ノートを開いてみると「あっ、もう読んでる」ってことになるわけです。ところが若い時に読んだ本というのは覚えていられるんですね。だからみなさんにはいっぱい本を読んでもらって、あるいは耳学問でもいいからどんどんやってもらいたい。そして、本はこういう風に読むんだというのを学んでもらいたいんです。議論というものは、それなりのものがあるって初めて成立するものですから。

あと、確かにこのスタイルは村川（堅太郎）先生のものに似ています。村川先生の学部ゼミはとても印象深く、同時におっかなかったから印象に残っているのかもしれないけれど。それから柴田先生も似てるね。ゼミのやり方についてはこのお二人に影響を受けていますね。

クリオ： 先生は1979年から1年間西ベルリンのベルリン自由大学で、85年から1年間は東ベルリンのフンボルト大学で指導に当たられました。日本のドイツ史研究者としては非常に珍しい経験をお持ちなのではないかと思えます。西独・東独・日本と3つの社会を見聞し、それぞれの学生に触れられたわけですが、印象的な感想がありましたらお聞かせください。

木村： 最初の学生としての留学の時にくらべて、段々等身大に見えるようになりました。当時は先生はすべて偉く見えるし、学生も良く知っているんじゃないかと思ったんだけど、段々同じ学生だと、ドイツ人だって知らないことは知らないというのが分かってきたんですね。自由大学（西ベルリン）の時の方が学生とよくつきあいましたけれども、特に日本のことなんか全く知らないんですね。また東の場合にはほとんど授業なんてやらせませんから、個別に話すとか、博士論文の審査に立ち会うとかだけでした。ただ、マルクス主義が完全にカテキズム（教理問答）になっているというのは驚いたな。まず普通のところではマルクス主義の本は読ませないんですよ。エリートになる人間だけは仕方がないから知っておくという程度でして、何故なら社会主義社会についてマルクスは言っていないわけだから、役に立たないというわけです。ポツダムに行ってPH（ポツダム教育単科大学）の人と話していたら、あまりに知らないんで、こっちが「あなたたち、マルクス主義をどう心得ているか」という始末でして（笑）。こちらの方が遙かに知っているんですね。で、あちらは非常に不思議がって「なんでおまえ、そんなにマルクスの本なんか一生懸命読んでるんだ」と。

クリオ： 先生の最近のご活動で次第に重きをなしてきたものに、大学改革への取り組みがありますが、これを先生は積極的に取り組んでいらっしゃいます。現在の大学の問題点に、大学当局のイニシアチブと文部科学省の意向、そして学生の希望という当事者三者の意見がまったく乖離しており、すりあわせも十分でないまま改革が強行され、結局誰にも満足かないものになりつつあるという点があると思えます。大学評価・学位授与機構の職務を兼任されるなど、先生の近年の積極的な姿勢から判断して、大学の将来

に関して深刻な危機感をお持ちだと思いますが、今後の大学と歴史学教育についてのヴィジョンをお聞かせください。

木村： 私も全然積極的じゃないんですよ（笑）。まあこの種の仕事を「雑用」というのはよくわかります。特に文学部志望の人は大学に入って研究者になるという人はいても、行政職になろうと入ってきた人は誰もいませんから。でも、黙っていても行政は向こうからくるわけです。少なくとも、国公立にいる限り何らかの評価は避けがたいと思いましたがね。何故なら税金を使う以上、その効果や使用内容を明らかにしろと言われて、対応せざるをえないですから。ある額だけ頂いて、こちらを信用してほしいといっても、それは通らないし、またそれほど立派な自己規制が現在働いているのか、といったらそうじゃない。だから、予算の使途は無駄になっていないというのをせめて言わなければならぬ。これは当然であって、嫌だとか、外部からの干渉だとかとは別の議論だと思えますね。私立大学だって同じでしょ。学生からお金を取っている以上、払う側としてその使途を知りたいと思うのは当然のことです。

とにかく大学制度というものは150年間変わっていないんだからね。日本にある公的組織の中で、大学ほど変わっていないところはないんじゃないかな。例えばホブズボームが言うように、大学は相変わらずの集約型大量生産方式で、こんな狭いキャンパスに何千人もいて、毎年きちんきちんと3、4千人の卒業生を出している。まあこんな具合で、いろいろな改革の要請がでてくるというのは必至なんですね。

それから大学改革のイニシアチブについて言えば、たしかに「国」の意向が強いですね。まず教官は教育と研究が優先だから、自分でやろうとは思わない。もちろん学生は4年たつと大部分は出てしまうので、個別的に不満を言う人はいるだろうけど、まとまった声にならないわけです。それで結局は、安定した国家機構を持つ官僚組織の発言が——次官が辞めようとも無名の官僚群に引き継がれますから——強くなるってことでしょね。あんまりいい傾向じゃないかもしれないけれど。

Section 3 出版について

クリオ： 先生は以前から、歴史家たるものその専門領域について概説を書けなきゃいかんということをおっしゃっています。いかに少ないスペースであっても素人にもわかるように説明できるのが本当のプロである、ということで、百科事典の項目執筆からドイツ史の入門書に至るまで、その実践も枚挙にいとまがないほどです。こうした概説や通史へのこだわりは、個別研究だけに埋没するまいという先生ご自身のバランス感覚から発したものののでしょうか、それとも例えば社会に対して過去を説明するという歴史家の義務のようなものをお考えなのでしょうか。

木村： これは私も若い時から聞かされていたことだけど、研究者というものは最後にはその分野に関する良い概説や大きな通史を書けなければならない、というのですね。そしてその際はむしろ歴史叙述というか、文章のあり方も重要になってきます。林先生がその典型で、文章力なんていうのが効いてくるわけです。つまり総合力でね、単にいろんなことを知っているとか時代区分に詳しいとかじゃなくて、日本語として読めるものでなければならない。その点、僕は全くダメですが（笑）。

それから定説とかオーソドックスとは何かというと、つまりは辞書の項目なんですね。だから事典関係の仕事の大部分は頼まれたものであっても、僕は項目を書く時は相当力を入れています。例えばどこかでヘルダーを引き受けたんですけど、日本語ででているヘルダーのものは全部読みました（編集部注：『世界民族問題事典』のこと）。その機会に勉強できるでしょ。そうするとやっぱり役に立ちますし、書こうと思つて勉強すると、ある目的があつて読むわけで、きちんと読みますからね。ですから「お

まえはこう書いているけれども」と言われたら、それについての根拠を示して受け答えできますよ。

また概説とは何かというと、総合力と省略力なんです。以前、三省堂の『ドイツ・ハンドブック』で概説を書いたんですけども、その時に初めて気が付いたんですね。実は自分の知らないところって長くなる、なんかみんな重要そうで何を落としていいかわからないから(笑)。一方、ヴァイマル共和国になると任せておいてくれというわけで、どんどん短くできるわけです。たとえ普通の本に載っていることを何故あなたは書かないのかって言われても、いくらでも説明できますよ。普通の人はずう言うかもしれないけれど、実際はこうこうこういうわけで、実はあんまり重要じゃないんだ、本質はここにあるんだ、と言えるわけでしょ。だからあの『ドイツ・ハンドブック』は今でも心得として時々見ますよ。本当に前半が長いんだ(笑)。ああいうものを書く、初めて自分の実力がわかりますね。

あと自分で言うのも何だけれども、確かに僕にはある種のバランス感覚があると思います。まあバランス感覚なんて言う調子がいいけれども、要は臆病なんですね。柴田先生からも「君はパッションがないなあ」と言われて、「すみません」なんて謝ったんですけど、やっぱりないんだろうね(笑)。パッションというのは、これだつていうのがないとダメなんだろうけれど、「さらにこれも重要だ」とか「あれも見逃してはいけない」とか言ってるからキチンとなってしまう。だから喜安さんなんかには随分批判されました。「全部書いてあるけれども、面白くない」と(笑)。僕は『兵士の革命』で「人」を書いたつもりなんだけど、喜安さんや三宅立さんのものとくらべると違いは歴然でしょう。

クリオ： そのパッションについてなんです、先生がお書きになったものとか公式の場に出られた時の印象は謹厳実直で一画もゆるがせにしない、淡々とお書きになるという印象と、こうやってお話になっている時やゼミの時の軽妙洒脱な語り口というのが、相当の相違があるというのは事実だと思います。このヤヌスの相貌は意図的に使い分けていらっしゃるのですか？

木村： いや、そんなことはないですよ(笑)。でもやっぱり、ドイツに行ってから変わりましたね。茨城大学とか立教の最初の頃は非常に堅い人間だと思われていて、僕はもともとそうじゃないんだけれどもね、ちょっと構えちゃうとか、若いということがあったのかもしれない。今の人から見ればずいぶん若くして教壇に立っちゃったから。だからこうなったのはそう古いことではないですね。

たぶんこれは子供の時の経験とか育った経験とかが影響するんでしょうが、私は特定の個人や人の心に踏み入れたくないっていうかね。まあ踏み入れるのはいいんだけど、それを書きたくないっていうのがあるんです。本当にそうなのか、わかって人の心を書いているのか、という不安があって、そこへいくと喜安さんなんかは「いや、わかって書いてるんだ」なんて言う(笑)。持って生まれたつていうものじゃないかもしれないけれど、僕は昔から恋愛はできないんじゃないかって言われてたんだ(笑)。人を好きになるとか嫌いになるとかができないだろうというのではなくて、ただ我を忘れて全てを投げ打つことができない人間と思われていた。そういうことができる人はうらやましいんだけど、同時に一種の危険性みたいなものも感じちゃうんだよね。非常に情熱がほとばしる人というのは、一歩間違うとどうということになるのかっていう。まあ、こんなことを解説していること自体が、熱がない証拠なんだな(笑)。

また書いたものについては、確かに林先生からの影響を受けていますね。先生は歴史の論文とか歴史叙述からはできるだけ形容詞を取って史料や史実で説明しなさいと強調されていました。例えば「怒濤のようなストライキ」とか言わないで、もちろん面白くなくなっちゃうかもしれないけれど、例えばドイツのストライキは年平均でこ

れしか起きていない、この年になったらこれだけの数のストライキが起きた、そういうふうには言えない。それで読み手が「なるほど、これはすごいストライキの波だったんだな」と感じれば良いのであって、読み手の感情をこちらが形容詞で押しつけていくっていうのは、歴史論文としては良くない、と。これは非常に記憶に残っています。ただそれがいいのかどうかというのは、今でも確信がないのですが。

歴史家観

クリオ： 先生の好んで取り上げられる歴史家というのがあります。先程も話に出ましたハルガルテンやエアスなど、彼らには一定の共通点があるように思われます。つまり、みな独創的な研究をしながら、出身地では受け入れられず、拒絶や迫害を受けて異境へと亡命せざるを得なかった歴史家たちです。こういった人たちに対して、先生を含め現代日本の歴史研究者の大半は、革命には失敗したにせよ、その後も安全圏にとどまり迫害や異端視された経験はもっていません。それにもかかわらずと言いますか、あるいはそうであるが故にかえて我々はこうした「異端者たち」に惹きつけられるのかもしれない。先生の場合そうした思い入れはどのようなところから出てきているのでしょうか。後に続く者たちのアドバイスとして、先生の理想とする歴史家像をお教えてください。

木村： 具体的にこの人だ、というのはいないですね。カール・シュミットはよく挙げるけど、それは分析が優れていて「世の中にはこれほど頭のシャープな学者がいるんだ」というので覚えているわけです。すごいと思って憧れるという意味では、僕はホブズボームなんかは好きですね。E・H・カーも一時は好きだったんですけど、ちょっと考えるとよくわからない人だよ（笑）。前半生と後半生がかなり違うしね。強いて言えば、ブルクハルトやエアスなんていうのは、あまりにも自分とは違う生き方という意味で、惹かれるということはありませんね。やはり直接教わったお師匠さんの方が近いのかな。必ずしも全てがいいとはいいませんが、村川先生には歴史のスタイルとして相当影響を受けました。柴田先生も「理想の歴史家」というわけではないけれども、面白い歴史家ですよ。

クリオ： 大学の二側面として研究と教育があるということはずっと言われ続けてきてまして、これはこれからも余り変化はないと思うのですが、この二側面は必ずしも予定調和的に確立されるものとは言えません。教室を満杯にして学生を陶醉させたい人もいるでしょうし、逆に紙の上では眼光紙背に徹して寸鉄人を刺すコメントで知られる人も、人前に連れてくるとさっぱりということもあるわけです。先生はこれまでこの二つの側面、さらに出版という役割をいかに演じて、どのような大学人たろうとされてきたのでしょうか。

木村： うーん・・・やっぱり先ほど言ったように、若い時に就職しすぎちゃったんで、10年くらいは研究者だという意識が強くて、当時の学生諸君には大変申し訳ないという気持ちがあります。一方では学生との年齢が非常に近いから、教育はたぶんひどかったと思うんだけど、課外で一緒に遊んだりとか（笑）。教育に気を配るようになったのは、わりと新しいですね。東大文学部っていうのは、自分の研究過程を見せるのが授業だっていうスタイルで、これは非常に珍しいんです。おそらく全国的にやっているのはここだけじゃないのかなあ。林先生なんかはその典型で、講義が終われば本が一冊できるわけだよ。

でも私も最近少し変わってきましたね。去年は毎回レジュメを配りましたが、こんなことは初めてなんです。史料を配るようになったのも90年代の半ば以降ですね。もちろん学生がわかっているのかというのを確認するためです。だから大学人としてはあまり適当ではなかったんですが、もちろんこれからの人はそうはいかないでしょうね。

これから学部や大学院で勉強しようとする人には、繰り返しになりますが、できるだけ多くの本を読み、様々な授業や研究会、さらには学界に参加して耳学問という形でも、とにかく基礎的なデータを充実させることをお願いしたいですね。

確か漱石がどこかで書いていることですが、彼は 10 代半ばで俳句をやってみたがすぐに投げ出した。その理由は自分は旅をしていないから俳句はわからないというのです。後に子規の手ほどきで彼は俳句の方でもなかなかの腕前を發揮したといわれるんですが、僕は俳句についてはまったくの門外漢なので、この旅をしていないということについて俳句界の解釈がどういうことなのか知りません。しかし、俳句は連想の文学だと言うことを聞いたことがあるので、それをもとにしていけば、漱石の言わんとしていることは、旅をしていないので連想のデータが乏しい、たとえば菜の花といってもさまざまな土地柄で咲き方や菜の花のおかれた背景が違うということが実感をとまなっていない。だから俳句を作る場合でも、鑑賞する場合でも深みに欠けるのだ、ということではなかったかと勝手に考えています。

実は歴史研究でも似たところがあって、基礎的データ量は歴史分析や評価の射程に決定的な意味を持っていると確信しています。しかも文献は何歳で読んだかがその読み方に大きな影響を持ちますから、同じ文献でも若いときに読んだ印象と後から読んだのとはずいぶん違うことがありますよ。読書によってデータベースを作り、そのデータベースの豊かさによって読み方が違ってくるといふ相互作用が大切だということです。書物だけがデータベースの元ではないというのは事実でしょうが、だからといって文献から学ぶ基礎的データがなお最も多いのだということを忘れるようでは困ります。インターネットは僕もよく利用するようになりましたが、いまのところそこでの情報は断片の収集にすぎません。引退寸前の人間の繰り返し言みたいに聞こえるかもしれませんが、この点だけは努力してもらいたいですね。

クリオ： 本日はどうも長い間、ありがとうございました。

2002 年 2 月 28 日 於：木村研究室（本郷）

訊き手：辻 英史

協力：池田嘉郎・香西秀樹・木村ゼミ（大学院）

録音：山本成生

木村 靖二 (きむら せいじ)

1943年、東京生まれ。1965年東京大学文学部西洋史科卒業。同助手、茨城大学教養部講師、同助教授、立教大学文学部助教授、同教授を経て、1990年より東京大学大学院人文社会系研究科教授

著作 (編著を含む、複数年に渡るものは第一回配本年のみを記す)

- 1983 『ヨーロッパ近代史再考』(北原敦・福井憲彦・藤本和貴氏と共編、ミネルヴァ書房)
- 1987 『ワイマール文化 早熟な大衆文化のゆくえ』(平井正ほか共著、有斐閣)
- 1988 『兵士の革命 1918年ドイツ』(東京大学出版会)
- 1994 『世界史総合図録』(成瀬治・佐藤次高・岸本美緒氏と共著、山川出版社)
- 1994 『クロニク世界全史』(樺山紘一・窪添慶文・湯川武氏と共著、講談社)
- 1995 『詳説世界史研究』(木下康彦・吉田寅氏と共著、山川出版社)
- 1996 『世界史リブレット47 二つの世界大戦』(山川出版社)
- 1996 『世界歴史大系 ドイツ史』全3巻(成瀬治・山田欣吾氏と共編、山川出版社)
- 1997 『地域の世界史10 人と人の地域史』(上田信氏と共著、山川出版社)
- 1997 『世界史写真集』(共編、山川出版社)
- 1997 『世界の歴史26 世界大戦と現代文化の開幕』(柴宜弘・長沼秀世氏と共著、中央公論社)
- 2000 『地域の世界史12 地域への展望』(長沢栄治氏と共編、山川出版社)
- 2000 『ドイツの歴史 新ヨーロッパ中心国の軌跡』(有斐閣)
- 2001 『世界各国史 ドイツ』(山川出版社)

論考

- 1965 「メラー・ファン・デン・ブルックにおける革命的保守主義 保守派の時代対応の考察」『現代史研究』14号
- 1966 「ドイツ国家国民党1918-1920 Nationale Opposition 政策の成立」『現代史研究』17号
- 1968 「ドイツ国家国民党1918-1920」『史学雑誌』77編2号
- 1968 「〈近衛新体制〉期の教育政策を通して」『歴史学研究』336号(松尾章一、伊集院立氏と共著)
- 1968 「〈近衛新体制〉期の教育政策」『歴史学研究』339号(共著、同上)
- 1970 「ドイツ連邦共和国における最近の共産党史研究と史料状況」『史学雑誌』79編11号
- 1972 「ファシズム時代の諸情況」『社会運動史』1号
- 1973 「ルール西部における炭鉱労働者運動とドイツ革命」『社会運動史』3号
- 1974 「ドイツ革命におけるキール水兵運動と兵士評議会」『季刊社会思想』3巻3、4号
- 1975 「ヴァイマル共和国におけるドイツ保守派の解体」『社会科学研究』27巻2号
- 1977 「アルフレート・フーゲンベルクの思想と政治」『近代史における政治と思想』(柴田三千雄・成瀬治編、山川出版社)
- 1977 「〈政治〉の解放 ドイツにおける現代の始まり」『社会科学への招待 歴史学』(樺山紘一編、日本評論社)
- 1979 「伝統的保守派とナチス」『ファシズム期の国家と社会7 運動と抵抗(中)』(東京大学社会科学研究所編)
- 1979 「ドイツ革命とレーテ」『月刊労働問題増刊』7号
- 1984 「ヴァイマル共和国」『ドイツ史研究入門』(西川正雄編、東京大学出版会)
- 1984 「兵士評議会運動とハンブルク7か条の成立」『現代史研究』31号(現代史研究会発足25周年・村瀬興雄先生古稀記念論集)
- 1985 「ドイツ革命研究に関する二、三のメモ」『社会運動史』10号
- 1994 「ナチズム論の現在」『茨城史学』29号

- 1995 「ドイツ革命とオーストリア革命」『講座世界史 5 強者の論理 帝国主義の時代』
(歴史学研究会編、東京大学出版会)
- 1995 「ドイツにおける国民国家への道」『ヨーロッパにおける国民国家の生成と地域主義
の台頭』(平成6年度科学研究費補助金総合研究A 研究成果報告書)
- 1996 「ドイツ歴史学の戦後 50年 ナチズム論をめぐって」『史苑』56編2号
- 1999 「公共圏の変容と転換 第一次世界大戦下のドイツを例に」『岩波講座世界歴史 23
アジアとヨーロッパ 1900年代-1920年代』(山内昌之編、岩波書店)
- 1999 「ヨーロッパ近代の崩壊」『現代世界のなかの西洋』『西洋世界の歴史』(近藤和彦編、
山川出版社)(油井大三郎氏と共著)
- 2000 「地域への展望」『地域への展望』(長沢栄治氏と共著)
- 2000 「国民国家をこえるか 国民国家の変遷とヨーロッパ連合から考える」『地域への展望』
- 2000 「ファシズム論再考」『史学雑誌』109編12号(第98回史学会大会西洋史部会の講演の内
容紹介)

書評・その他

- 1964 「無責任者の感じたこと ドイツ保守派の危機意識 1917-33 第63回史学会共通課題
報告をきいて」『現代史研究』13号(伊東孝之氏と共著)
- 1976 「回顧と展望 1975年の歴史学界 現代 ドイツ」『史学雑誌』85編5号
- 1976 「ヘルムート・ペーメ、大野英二・藤本建夫訳『現代ドイツ社会経済史序説』」
『甲南経済学論集』17巻2号
- 1977 「回顧と展望 1976年の歴史学界 現代 ドイツ」『史学雑誌』86編5号
- 1983 「回顧と展望 1982年の歴史学界 現代 ドイツ」『史学雑誌』92編5号
- 1983 「栗原優著『ナチズム体制の成立 ワイマル共和国の崩壊と経済界』」『エコノミスト』
61年7号
- 1986 「蔭山宏『ワイマール文化とファシズム』・八田恭昌『ヒトラーを生んだ国』 ワイマール
的状况をとらえなおす」『エコノミスト』64年50号
- 1987 「回顧と展望 1986年の歴史学界 現代 一般」『史学雑誌』96編5号
- 1987 「ヒトラーはすでに〈神話〉か」『朝日ジャーナル』29巻2号(シンポジウムの記録。
草森紳一・般戸溝之氏と共著)
- 1990 「回顧と展望 1989年の歴史学界 現代 一般」『史学雑誌』99編5号
- 1995 「回顧と展望 1994年の歴史学界 歴史理論」『史学雑誌』103編5号
- 1995 「ヨーロッパの中のドイツ」『ドイツ研究』21号(第11回日本ドイツ学会総会シンポ
ジウムの記録であり、加藤千幸・大石紀一郎氏と共著、討論を含む)
- 1996 「山本秀行『ナチズムの記憶』」『ドイツ研究』22号
- 1996 「大国化するドイツ 憂鬱と不安」『ドイツ研究』23号(第12回日本ドイツ学会総会
シンポジウムの記録)
- 1999 「ドイツ型知の再生産 歴史学の場合」『ドイツ研究』27号(第14回日本ドイツ学会総会
シンポジウム「グローバル化のなかのドイツ研究」の記録)
- 1999 「回顧と展望 1998年の歴史学界 総説」『史学雑誌』108編5号
- 1999 「エリアス(ノルベルト)」『20世紀の歴史家たち3(世界編上)』(尾形勇・樺山紘一・
木畑洋編、刀水書房)
- 2000 「遙かなドイツ、身近なドイツ」『ドイツの歴史』を編集して『書斎の窓』(有斐閣)
497号
- 2000 「村瀬先生を偲ぶ」『現代史研究』46号
- 2001 「ヴェーラー(ハンス・ウルリヒ)」『20世紀の歴史家たち4(世界編下)』(尾形勇・
樺山紘一・木畑洋一編、刀水書房)

2001 「コラム歴史の風 歴史家の歴史 歴史学の歴史」『史学雑誌』110 編 1 号

編訳

- 1965 G. W. F. ハルガルテン「50年を経てみて 第一次世界大戦論」『現代史研究』16号
(現代史研究会における講演原稿、伊東孝之氏と共訳)
- 1971 K. コルシュ『労働者評議会の思想的展開 レーテ運動と過度期社会』(山本秀行氏と共訳、
社会評論社)(再版、批評社、1979年)
- 1983 F. フィッシャー『世界強国への道 ドイツの挑戦 1914-1918年』(村瀬興雄監訳、
岩波書店)(下巻21~23章を担当)
- 1991 デートレフ・ポイカート『ナチス・ドイツ ある近代の社会史 ナチ支配下の
(ふつうの人びと)の日常』(山本秀行氏と共訳、三元社)(新装版、1997年)

インタビュー・対談

- 1985 「座談会 社会運動史の回顧と現況」『社会運動史』10号(喜安 朗、加藤晴康、近藤和彦、
北原敦、山本秀行、坂巻清、石井規衛、相良匡俊、松沢哲成、福井憲彦氏らと)
- 1991 「インタビュー 木村靖二氏に聞く」(橋場弦、聞き手)『クリオ』5号
- 1991 『歴史の重さ ヨーロッパの政治文化を考える』(近藤和彦・福井憲彦編、日本エディター
スクール出版部)(史学会100周年記念シンポジウム「ヨーロッパ近現代史における文化
と政治」[1989年11月]の記録であり、文中「コメント2」として発言)
- 1999 「ヒトラー+ユダヤ人絶滅は必然か?」『毎日ムック 第3 帝国の野望 1930-1939』
(毎日新聞社)(三島憲一・徳永恂氏らとの座談会)

辞典・事典(項目執筆)

- 1973 『小百科事典』(平凡社)
- 1975 『小学館万有百科事典』(小学館)
- 1975 『百科年鑑』(平凡社)(「西ドイツ」)
- 1984 『平凡社大百科事典』(平凡社)(「ドイツ共産党」)
- 1995 『世界民族問題辞典』(平凡社)(「ドイツ植民地政策」「汎ゲルマン主義」「ラント」
「プロイセン」「ヘルダー」「普仏戦争」など14項目)
- 1997 『コンサイス20世紀思想辞典 第2版』(三省堂)(「黄禍論」など3項目)
- 1998 『岩波哲学思想事典』(岩波書店)
- 1984 『日本大百科全書(ニッポニカ)』(小学館)(「ドイツ保守党」など4項目)
- 1995 『大辞林 第2版』(三省堂)
- 1999 『歴史学事典』(弘文堂)(「戦争協力」「オーデル=ナイセ問題」)
- 2001 『角川世界史事典』(角川書店)(「ヴァイマル共和国」)